

強情灸

遊人亭だん太

熊 おい、辰っ、辰やないかい。どこいくんや、ちょっとぐらい寄って
辰 行ったらどないやねん

熊 あ、こらあ、熊か
熊 かやないがな、どないしたんや、ボーツとした顔して

辰 いや実はな、こないだからちよつと身体の具合が悪かったもんやさ
熊 かいにな、灸すえにいったんや。

辰 ほお、灸か。いやいや、おかしな按摩するぐらいやったら、灸の方
熊 がよお効く言うさかいなあ。で、何やその手に持つてる袋は？

辰 これか、こらモグサやがな
熊 あ、なるほどなあ、灸屋だけで足らんから、家帰っても据えようち
辰 ゆう魂胆かいな

辰 いや、そういう魂胆でもないねんけどな。実を言うとな、ここんと
熊 こちよつと灸屋に顔出しでけんことになつてんねん

辰 「顔出しでけん」って？、そら穩やかな話やないがな、何ぞあつた
熊 んか？

辰 話しせんと分からんけどな、こないだからずつと頭が重かったもん
熊 やさかいに、関口の隠居はんとこに相談に行つたんや。そしたら「お

辰 前そら肩が凝ってるんやで、肩こりちゆうのは万秒の元やさかいに
熊 治さんといかん。灸でも据えに行つたらどないや」ちゆうんでな、

辰 隣町にある灸四郎ちゆう灸屋教えてもろたんや。

熊 ああ、熱いちゆうんで有名な灸屋か

辰 そおやがな、まあ、その代わり、よお効くちゆうねんけどな。行つ
熊 たところがえらい人や、わしや、あんなもん年寄りしか据えんもん

辰 やと思てたけど違うなあ、この頃また流行ってるか何かして、わい
熊 ぐらいの若い奴もぎよーさん来てんのやがな。そおそお、中には若

辰 いおなごも来てるがな。
熊 ほお、若い女ごも来てるんか。

辰 来てるがな。えらいぎよーさん来とつたけどな、中に一人だけ別嬪
熊 がいとつたなあ。年のころなら、二十四、五、六、七、八、九

辰 どこまでいくねん
熊 色の抜けるように白い、どことなしに愛嬌のあるええ年増や。わし

辰 やこの女ご見れただけでも灸屋来た甲斐があつたなと思たなあ
熊 お前、何を考えてんのや、やらしいやつちやなあ。で、どないした
辰 んや？

辰 それよ、この女ごに会えたんはええねんけどな、今も言うたように
熊 えらい人やろ、お前も知ってるようにわしやイラチやがな、待つて

辰 んのがだれるがな。どないしたるかしらんホンマにもお・・イラ

イラキヨロキヨロしとったんや。ほんだらその年増が「ちよっとお兄さん、ちよっとお兄さん」わいに声かけよんねん。

ほお

「何だねん？」ちゆうたら「お兄さん、えらいお急ぎの様子でございますけれども、何でございましたら私の番と代わりまひよか。いえね、私も据えるつもりで来ましてんけれども、最前から人さんの見てますとどおも熱いよおに思えて、据えそびれておりますので、よかつたら番、代わりまひよか？」と、こない言うねん。

そら、えらい厚かましおますわ』『厚かましいことおませんわ、私の方からお頼みしてまんねんさかいに』と、ニィッツと笑ろた顔がね、たまらんわね・・・

よだれを拭け、よだれを、ホンマにもお。ほんでどないしてん？

それよ「ほんだら、えらいすんまへんなあ」ちゆうて代わってもろたと思いいな。そおこおするうちに奥の方から「次のお方」と呼びよんねん、わいの番やがな。

「ほんだら姐さん、お先い失礼さしていただきます」ちよっとかつこつけて中へシュツと入って行つたてん。この女ごが後ろで見てるかいなあ思たら、着物脱ぐのも力が入るで。シュツと着物を脱いでケツをパツとまくって決まったとこなんかは、まあお前にも見し

たかつたなあ。

見とないわ、そんな汚いもん。誰が見たいねんホンマに

ほんだら周りの連中が焼きもち半分に何やゴチャゴチャ言うとなん「もし、あの男えらい粋がつて入りよりましたけども、よお辛抱しよりまっしやるか？」「あきまへんあきまへん、そんなもん皮きりで泣き声上げよりまっせ」こんなこと言うとなんねん。

その声がワイの耳にチラツと入ったもんやさかい、この辺の線がプチプチプチ、五本ほど切れたがな。ましてこれ、番代わってくれた女ごに対してもあとへ寄せられへん、そやる。

灸屋がモグサと線香持つて後ろへ周りよつたもんやさかいに「おい、お前とこ今日何ほほど据えるつもりやねん？」「へえ、今日はとりあえず三十三ほど据えさして頂きます」「なに？ たつたの三十三かい、おらこお見えても忙しい人間じゃ、一つずつボチボチ据えてたんでは夜が明けてしまうわい。かまへん、三十三、いっぺんに据えてくれ」、向こおへ聞こえるよおに大きな声で言うたつたんや。ほんだらまあその女ご「まあ男らしいお人やこと、私もおんなじ所帯の苦勞するんやったら、こんな男氣のある人と、一苦勞も二苦勞もしてみたいわ」

熊 なんかいな、その女ごそんなこと言いよったんかいな？
 辰 さあ、言いたそおな顔してこっち見とんねん。
 熊 言うたんと違うんかいな

辰 顔見たら分かるがな、腹で言うとするがな、目え見たら分かるがな。
 辰 ほたら灸屋が「兄さんにいさん、そんな無茶なことやめときなはれ。
 辰 三十三もいっぺんに据えたらかえって体に毒でっせ。悪い子と言わ
 辰 しまへん、そんな無茶なことはやめときなはれ」と、わしゃ言うて
 辰 くれるもんやと思うがな。あんなとこで迂闊に冗談言うもんやあれ
 辰 へんで、シャレが分からんねがな「さよか」言うなり、三十三のモ
 辰 グサ背中へペペペッペッ、早いなの、もの言う間も何もあれ
 辰 へんがな。据えたと思たら今度は火いや、線香の火をシュシュ
 辰 シュシュシュ・・・

辰 しばらくしたらジュワァッつと熱なつてくんねがな「ううッ」つ
 辰 と熱いんやけど、この女ごの手前、辛抱せんとしゃーないやろ「ん
 辰 っんッ・・」けどお前、背中で三十三の火がいつぺんに燃え
 辰 てる、背中でき火をしてるよおなもんやがな。

辰 しまいに辛抱たまらんよおになつて「熱つつうッ」一間ほど飛び
 辰 上がつてなあ。そこらのもんバンバン、バババババッ蹴り倒して表
 辰 へシュッつと飛んで出た。あんときわしゃつくづくカチカチ山の狸

の気持ちがあつたなあ。

何をしよもないこと言つとんねん。

辰 それからかつこ悪うて、向こおの灸屋顔出しでけんねがな。ほんで
 辰 こないしてちよつとずつ買おてきて、隣のお婆んに据えてもろてん
 辰 ねやがな。

辰 ケツタイなやつちやなあ、お前わ。たかが灸やないかい、しっかり
 辰 せんかい。

辰 「たかが灸」ちゆうけどねえ、あんな熱いもんないよ。おら背中に
 辰 爆弾が落ちたんかと思たがな。

辰 何を言うてんねん、あんなもん皮の上チリチリチリつとやくだけの
 辰 ことやがな

辰 せやけど、そのチリチリが熱いねんさかい。

辰 「熱い熱い」言うけどなあ、熱いさかい効くよおになつたあんねん、
 辰 熱なかつたらすでもお死んでるんやがな。

辰 おまえはねえ、据えたことないさかいそんな気楽なことが言えるん
 辰 や。おら現に背中に三十三個の灸・・

辰 おいおいおい、今、聞き捨てならんこと言いやがったなあ。お
 辰 ら子供の時分から灸は据え慣れてるんや、据えすぎてるちゆうやつ

辰 ちゃ。おかしなこと言わんといてくれ。

辰 そう言やあお前、子供の時分、寝しよんべん垂れしてお婆んに据えてもろてたなあ。

辰 やかましいわアホ。お前らみたいなあんなまめつぶみたいなんと違うぞ、わしら、こんな大きな灸でなかったらもお効かんよおな身体になつてんねんさかいな。

辰 あのねえ、その豆粒みたいなんが、かえって熱いねんさかい。

辰 まだぬかしてけつかるな、よっしゃ、そのモグサちよつとこつちかせ。

辰 えっ？

辰 モグサをこつちかせつちゆうねん。

辰 こんなもん、どないすんねん？

辰 ホンマもんの灸ちゆうんはこおいう風に据えるという見本を見したるさかい、こつちかせちゆうねん。

辰 そんなことできるのんか？

辰 できるのんか？か？何いうてけつかんねん、こつち貸せアンダラ。このモグサをやなあこおしてこお皆出して、こおしてこお……、よおほぐすねん。

辰 おい、お前、それ皆いつぺんに据えるつもりか？それ、やめといた

辰 方がええのんちゆうか、そりや無茶やで。

辰 何いうてけつかるねん、これから「ビツクリ据え」つちゆうのん見したるさかい、よお見とけアホ。これをこおよおほぐして、形をこお・・・整えてやねえ。

辰 うわあゝッ、何やソフトクリームみたいなもん作ったなあ、ちよつと何んかトツピングしょか？

辰 アホなこと言うてんと、ちよつと線香に火い点けてこつち持ってこい。

辰 お前、それホンマにやる気いか？やめといた方がええで、無茶や。何言うてけつかんねん、俺が承知で俺の腕でやるちゆうてんや、誰に文句言われる筋合いがあるかい、こつち貸せ。

辰 ええか、ひととこへ点けたんでは火の下がりが悪いさかいに、周りにズゝッと点けて行くんやないか、こおズゝッと。見てみいお前、勢いよお煙が出てきたやろ。「わが胸のもゆる思いにくらぶれば、煙は失せし桜島山よ」えゝか、これを我々の方では「桜島据え」つちゆうねん、よお覚えとけ。

熊 おいつ、ボオーつとしてんとそつちから吹け、風送れつちゆうねん。火がよお下りるよおに、フフフウゝッ……お前らこんな灸の一つ

